

RETAILER ACADEMY NEWS

Feb 2020 | Bentley Motors Japan



IGTC初戦、バサースト12時間で コンチネンタルGT3が優勝!

オーストラリアのマウントパンラサーキットで2月2日に開催されたインターコンチネンタルGTチャレンジ(IGTC)の2020年開幕戦となるバサースト12時間で、ベントレー・チームMスポーツのコンチネンタルGT3の7号車(ゲーノン/スーレ/ペッパー組)が優勝しました。バサースト12時間の優勝はベントレー史上初で、IGTCの優勝もベントレー初となりました。

日の出前の5時45分にスタートしたレースは、7号車は11番手というやや後方からのスタートとなりました。最初の3時間でセーフティカーが3度も入る荒れた展開になりましたが、3人のドライバーによ

るワールドクラスのスティントと、チームの戦略とピットストップ作戦が見事に噛み合い、7時間経過時点でトップに躍り出ました。レース中盤は落ち着いた展開が続きましたが、残り1時間強となってからは、上位を狙うチーム同士の激しいバトルが繰り広げられました。そのような展開にあって、7号車は一時的に順位を落としたものの、再逆転後はメルセデスAMG GT3やマクラーレン720S GT3などの猛追を振り切り、最終スティントを担当したゲーノンがトップでチェッカーフラッグを受けました。

ベントレーのモータースポーツ責任者 ポール・ウィリアムズは、「なんという週末だったのでしょうか。チームのクルーは限界まで追い込

まれましたが、どんなレース展開でも決して諦めてはいけないという素晴らしい例を見せてくれました。長い間、IGTCでの優勝を目指してきましたが、今回のコンチネンタルGT3の優勝は必然だったのだと思います。とにかく最高の形でシーズンのスタートを切れました」などと喜びを語っています。

IGTC第2戦は、7月にスパ・フランコルシャンで開催されるスパ24時間です。この間、チームMスポーツはカスタマーチームへの協力やベントレーモータースポーツアカデミーでの活動がメインとなります。世界中で戦うコンチネンタルGT3の応援をよろしくお願いします!





8シリーズの本命となる最高級4ドアクーペ BMW 8シリーズ グラン クーペ

BMWジャパンは、同社の最上級クーペモデルとなるBMW 8シリーズに、4ドアクーペモデルのBMW 8シリーズ グラン クーペを2019年10月25日に追加しました。2020年1月28日には、BMW M社の技術を投入したフラッグシップモデルのBMW M8 グラン クーペを発表し、ラインアップの拡充を図っています。

BMW 8シリーズ グラン クーペのまとめ

- スタイリッシュなデザインとスポーティな走行性能を併せ持つ4ドアクーペとして高い人気を誇った、BMW 6シリーズ グラン クーペの後継モデル。
- ホイールベースは、BMW 8シリーズ クーペに比べて205mm長い3,025mmとし、クーペモデルでありながら広い室内空間を確保しています。
- 今回、新たに「8シリーズ」となったことで、車格が全体的に引き上げられました。
- 価格帯は、下は1,100万円台から上は1,700万円台まで。

技術的な特徴

- ボディ骨格のセンタートンネル部にカーボン素材を用いるカーボン・コア構造を採用し、車体剛性の高さを実現。
- サスペンションは専用設計で、BMW 8シリーズ グラン クーペに比べてリアのトレッドを30mm拡大。
- 前方を注視することを条件に、高速道路での渋滞時に手放して運転できるようにした「ハンズ・オフ機能付き渋滞運転支援機能」を採用。
- 音声会話だけで適切な機能やサービスを起動できる「BMWインテリジェント・パーソナル・アシスタント」を搭載。
- 高性能3眼カメラ、高性能プロセッサおよびレーダーにより精度と正確性が向上した、最先端の運転支援システムを全モデルに標準装備。



BMW M8 グラン クーペの詳細

- V型8気筒Mツインパワーターボエンジンは、クロスバンク型エグゾーストマニフォールドの採用により、素早いレスポンスを実現
- ブレーキの作動、ブレーキブースター、ブレーキ制御をコンパクトに統合したM専用インテグレートッドブレーキシステムを採用
- インテリジェント4輪駆動システムの「BMW M xDrive」は、駆動力配分の設定が可能。初期設定の4WDモードに加え、ほぼ後輪駆動となる4WD SPORTモード、完全な後輪駆動となる2WDモードを用意
- インテリアは、MのロゴやMモデルカラーのステッチが刻まれた新デザインのセレクトアーレバー、カーボンファイバー製インテリアトリム、ホールド感の高い前後スポーツシートなどにより、スポーツモデルにふさわしい統一感のある空間を演出。
- よりアグレッシブなスポーツ走行を想定したBMW M8グラン クーペCompetitionでは、最高出力を25PSアップ。外観ではグリル、モデルバッジ、ドアミラーがハイグロスブラックになり、バイカラーの20インチホイールを採用。インテリアではアルカンタラを使用したヘッドライナーやシートなどで、よりスポーティな空間を演出



BMW M8グラン クーペ

- 4.4L V8 ガソリンエンジンを搭載
- 最高出力600PS、最大トルク750Nm

希望小売価格：2,194万円

BMW M8グラン クーペCompetition

- 4.4L V8 ガソリンエンジンを搭載
- 最高出力625PS、最大トルク750Nm

希望小売価格：2,397万円

モデルラインアップ

BMW 840i グラン クーペ

- 3.0L 直列6気筒ガソリンエンジンを搭載
- 最高出力340PS、最大トルク500Nm
- BMW 8シリーズとしては初となる後輪駆動を採用

希望小売価格：1,152万円

BMW 840i グラン クーペ M Sport

- 左記モデルにM Sportの装備を施したモデル

希望小売価格：1,298万円

BMW 840d xDrive グラン クーペ

- 3.0L 直列6気筒ディーゼルエンジンを搭載
- 最高出力319PS、最大トルク680Nm
- クリーンディーゼルエンジンに全輪駆動のxDriveを組み合わせたモデル

希望小売価格：1,226万円

BMW 840d xDrive グラン クーペ M Sport

- 左記モデルにM Sportの装備を施したモデル

希望小売価格：1,372万円

BMW M850i xDrive グラン クーペ

- 4.4L V8 ガソリンエンジンを搭載
- 最高出力530PS、最大トルク750Nm
- 右ハンドル仕様に加え、左ハンドル仕様も選択可能

希望小売価格：1,715万円

COMPETITOR INFORMATION



ジャガーランドローバーが画期的な変形シートを開発中

ジャガーランドローバーでは、シート形状を微調整することで、歩行時のように筋肉を刺激することができる「モーフィングシート」の開発に取り組んでいます。

これは、シートに長時間座り続けることによって引き起こされる健康上のリスクを減らすことを目的としたもの。シートに内蔵されたアクチュエーターがシート形状を連続的に微調整し、人間の歩行のリズムや骨盤振動の動きをシミュレート。これにより、運転者と乗員それぞれに最適な着座環境を提供します。

現在、全世界の4分の1を超える14億人が長時間座るような生活を送っているため、足腰などの筋肉が弱まっているといえます。特に長時間運転するような人の場合は腰痛のリスクを抱えています。同社ではこのような技術革新が健康上のリスクを軽減し、顧客の幸せや社会全体の改善につながるとしています。



アストンマーティンが新たな限定モデルを発表

アストンマーティンは、新たな限定モデルの「V12 スピードスター」を2020年後半にデビューさせることを発表しました。

アストンマーティンのデザイナーおよびエンジニアとの協力により、同社オーダーメイドサービス部門の「Q byアストンマーティン」が開発を担当。最先端のモータースポーツと航空技術を組み合わせた、ドライバー指向の2シータースポーツカーとなります。

デザインは、1959年のル・マン24時間とニルブルクリンク1000kmのレースで優勝した往年の名モデル「DBR1」と、2013年に創立100周年を記念して製作された「CC100スピードスターコンセプト」の2台をモチーフにしたもの。搭載されるエンジンは、最高出力約700 PS、最大トルク700 Nmを発揮する5.2L V12ツインターボで、トランスアクスル方式のZF製8速ATと組み合わせられます。

生産台数は88台で、デリバリーは2021年の第1四半期を予定しています。

ACADEMY

リテラー アカデミー ニュース100号到達 アーカイブもご活用ください

2013年9月13日に「ディーラー アカデミー ニュース」として出発したリテラー アカデミー ニュースが、今号で通算100号となりました。発行開始から2015年11月10日発行の第50号までは隔週刊で、競合車情報を中心（表紙も競合車の画像でした）に、ベントレーが採用する技術の解説や英国ブランドを取り扱うにあたって知っておいていただきたい英国の文化など、セールストークやお客さまとの会話で役立つような情報を掲載してきました。2016年1月発行の第51号からは、判型をA3縦型に変更してデザインを大幅にリニューアル。発行頻度を月に1度として、内容をさらに濃くしながらより見やすいビジュアルを目指しました。また、英国本社の方針に合わせ、2016年12月発行の第62号からは、名称を現行の「リテラー アカデミー ニュース」に変更しました。

すでにご案内済みですが、節目となる100号到達を契機に、過去の資産を活かしていただけるよう、51号以降のアカデミーニュースを閲覧できる「リテラー アカデミー ニュース アーカイブ」（写真右）を作成してリテラーの皆様に公開しています。モデル名とキーワードによる検索機能を付けていますので、過去の記事で気になるものがあれば、容易にたどり着けると思います。ぜひご活用ください。

昨年はベントレーの創業100周年でしたが、今年は「次の100年」を充実させる足がかりとなる大切な年です。リテラー アカデミー ニュースも、「次の100号」が皆様にとってさらに有益なものとなるよう、内容の充実に努めてまいります。



2013年9月に発行したディーラー アカデミー ニュース第1号。この頃の表紙には競合車の画像を使用していました。



2016年1月からは月刊になり、判型もA3縦に変更。大幅なリニューアルを行いました。

フライングスパー、細部へのこだわり ベントレー史上最も複雑なインテリア

新

型フライングスパーのインテリアは、世界で最も洗練されており、また世界で最もラグジュアリーなステッチが施された、ハンドメイドによる究極のキャビンの一例として、発表以来世界中で認知されてきています。

インテリアで使用するレザーのパーツ数は350に及び、総延長3km以上の糸を使用して、60個のオーダーメイドのコンポーネントに装飾されていきます。この完璧なフライングスパーのインテリアを構成するにあたっては、141人もベントレーの熟練工が腕を振ります。これらの熟練工は、ベントレーのマスタートレーナーによる最低5カ月のトレーニングを受け、最高レベルの技術を習得した人ばかり。ベントレーのインテリアを最高水準で作るには、さまざまな技術を学ぶ必要があるため、これだけの時間がかかるのです。

フライングスパーのインテリアに使用されているレザーは、すべてが食肉産業の副産物として、北欧の牧場で飼育されている雄牛の皮革

を継続して使用しています。北欧の気候により寄生虫がつきにくくなるため、革に自然にできる傷が極めて少なくなるのです。お客様は14種類のレザーカラーからお好きな色を選択できますが、ステッチに使用する糸の色は23種類から選択可能。ステッチによる幅広いコントラストによって、インテリアを完璧なものに仕上げるすることができます。

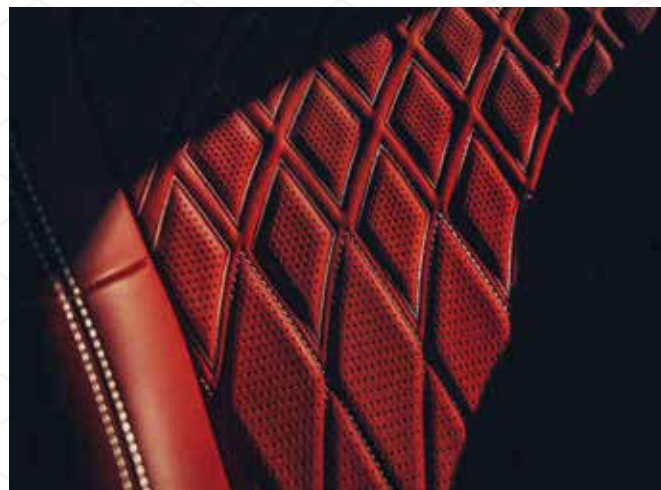
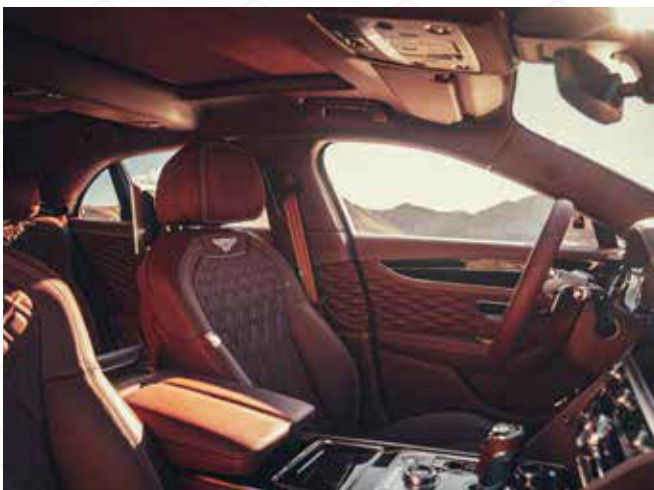
フライングスパーのインテリアにおける中心的存在であるステアリングは、世界の自動車産業の中で最も精巧に手作業で仕上げられたレザーパーツの最高傑作と言えるでしょう。ステアリングのクロスステッチには、168ものステッチを施すために、5mの糸を352個の縫い穴に正確に通していかなければなりません。この繊細な作業のため、ベントレーの熟練の職人でも1つのステアリングを仕上げるのに3時間半かかります。あまりにも複雑なうえに、専用の針を使用するこの作業は機械に代わってもらうことができないのです。

キャビン全体のステッチは5種類のミシンを使用して施されていきま

す。これは異なる太さの糸が使用されているためです。例えば、エアバッグが収められている部分のステッチには、安全性を最優先して、より細い糸で繊細に縫っています。

比類のない快適さのため、新型フライングスパーの4つのシートは、手作業で組み立てるために計12時間を要します。各シートのヘッドレストにオプションで入れることができるウイングドBエンブレムの刺繍は、5,103ものステッチで構成されています。

キャビンには新しい意匠も採用されています。それがフライングスパーのドアインサートに施される3Dダイヤモンドキルティングです。この意匠はコンセプトカー「EXP 10 Speed 6」で初めて披露されたもので、量産車への採用は自動車業界初となります。



クルー工場で工業用水リサイクルシステムの稼働を開始

ベントレー モーターズは、クルー工場で使用する工業用水のリサイクルシステムを導入し、稼働を開始しました。これにより、工場でのサステナビリティを進める新たな一歩を踏み出しました。ベントレーは現在、世界で最もサステナビリティを推進するラグジュアリーカーメーカーになることを目指し、カーボントラスト社からカーボンニュートラル認証を取得した後、水やエネルギーの使用、CO2排出量をさらに削減するため、さまざまな技術への投資を続けています。

今回現場に導入したシステムは、逆浸透現象を利用した水のリサイクルシステム。製造工程で使用された水に高圧ポンプで圧力をかけて汚染物質を分離し、塗装工程で使える塗膜の品質に影響を与えない純水を生成します。以前は、リサイクルシステムに引き込んだ使用済み用水の3分の1



程度しか純水を生成できませんでしたが、新システムの導入により引き込んだ水のほぼ全量を純水としてリサイクルすることが可能となりました。この余剰の2リットル分の水は、工場と敷地を潤すために活用されています。ピーター・ボッシュ取締役（マニュファクチャリング担当）は、「2020年には350,000リットル以上の水をリサイクルできると予測しており、現在はリサイクル水の全量を工場と敷地の維持に使用できています。例えばベントレーでは毎日16マイル以上の工場内のルートを洗浄していますが、工場を完璧な状態に保ち、敷地内の植物をしっかりと手入れできるだけの量が確保できています」などと、その効果について語っています。



MULLINER

ジュネーブモーターショーで マリナーが「バカラー」を発表へ



ベントレー モーターズは、3月に開催されるジュネーブモーターショーで、ベントレー マリナー バカラーを発表するとともに、コーチビルディングの未来についてのビジョンを打ち出します。

バカラーは、世界最古のコーチビルダーとして知られるマリナーが手作業で仕上げるもので、最も爽快感を感じられるグランドツーリングを象徴するものとなります。サステナビリティに注意を払い、倫理的に調達した素材は、ベントレーの100周年を記念して発表されたコンセプトカー「EXP 100 GT」からインスピレーションを得た、美しくドラマチックなデザインと融合しています。発表は現地時間の3月3日8時30分です。（詳細はリテラーアカデミーニュース3月号にも掲載する予定）

今年のジュネーブモーターショーでは、ベントレーブースではベンティガ ハイブリッド、フライングスパーが2台、コンチネンタルGT V8、EXP 100 GTが展示される予定です。バカラーの発表とともに、これらのモデルにもご注目ください。



AWARDS

EXP 100 GTが2つの栄誉ある賞を受賞



ベントレー モーターズの創業100周年を記念し、昨年7月10日に発表されたコンセプトカー「EXP 100 GT」が、2つの栄誉ある賞を受賞しました。

1つ目が、今年で35回目となるフランスのフェスティバル オートモービル インターナショナルで、「最も美しいコンセプトカー・オブ・ザ・イヤー」に選出されました。表彰式に出席したベントレーのデザイン部門の責任者であるステファン・シーラフは、「EXP 100 GTはコンセプトカー以上の存在で、サステナブルなラグジュアリーモビリティの未来のビジョンを示したものです。名誉あるこのフェスティバルで、このような特別な評価を受けることができて嬉しく思います」などと喜びを語っています。

2つ目が、GQ誌が主催するGQ カー アワードで、「ベスト・コンセプトカー」に選出されました。ロンドンでの授賞式に出席したエイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、「EXP 100 GTを製作したデザイナー、エンジニア、クラフトマンたちから成る最高のチームを代表し、この賞をいただけたことは大きな名誉です」などとコメントしています。なお、ベントレー モーターズは両イベントのいずれの会場にもEXP 100 GTを展示。出席者から大きな注目を集めていました。



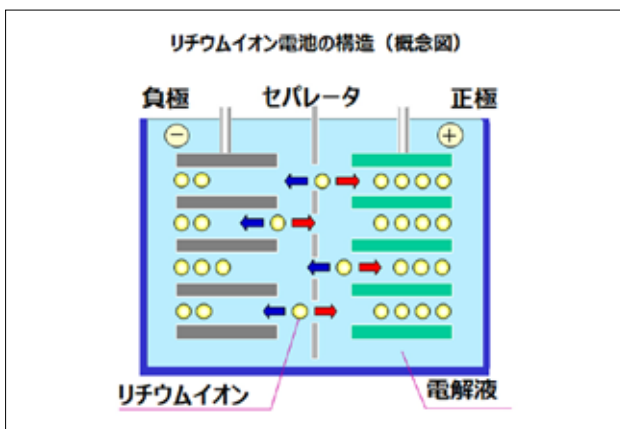
クルマの電池の基礎知識

環境性能に対する要求が高まる昨今。この先のクルマは電動化がどんどん進む可能性が大きくなっています。実際に未来を見据えたコンセプトカーは、そのほとんどが電動車になっています。そこで重要となるのが電池。今回はリチウムイオン電池を中心に、クルマの電動化に利用される電池のことを説明します。



リチウムイオン電池の特徴

リチウムイオン電池は1991年に世界で初めてソニーが開発した、比較的新しい電池です。正極と負極の間の電解液の中をリチウムイオンが行き来して充電や放電が行われます。多くの製品は、正極にリチウム酸化物、負極にカーボンを使っています。従来からある鉛バッテリーやニッケル水素電池と比べるとリチウムイオン電池は「エネルギー密度が高い」「3.6～3.7Vと電圧が高い」「自己放電が少ない」「寿命が長い」などと長所が多いため、高性能な電動車に採用されることが多くなっています。



正極と負極の間を、リチウムイオンが行ったり来たりすることで充電と放電を繰り返す。

リチウムイオン電池の弱点

「エネルギー密度が高い」ということは、それだけ万一の発火のときに、より強く大きな火が出ることを意味します。また、一度発火すると、水をかけたくらいではなかなか消化できないという特性もあるため、取り扱いには注意が必要です。安全装置が備わっていますが、過充電だけでなく、過放電も発火を招く可能性がありますので、用法を守った適切な使用が求められます。

リチウムイオン電池の生産

リチウムイオン電池の発火の原因のひとつは、生産工程における異物の混入です。そのため、リチウムイオン電池の生産の現場では、非常に厳格な環境の管理が行われています。日系のメーカーの工場では、

人が発する息などに含まれる水蒸気を嫌うため、生産工程をすべて自動化。さらに機械を据えた部屋は、完全に密閉して温度と湿度を一定に保つようになっています。まさにクリーンルームという状況です。そのためリチウムイオン電池は生産時に電力が非常に多く必要となっています。



リチウムイオン電池の生産工場は、自動化が進んでおり、人が介在するのは検査部門だけということも。

EV用とハイブリッド用で異なる特性が求められる

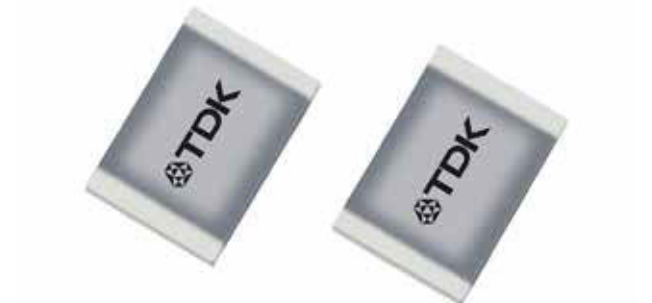
電動車には、ハイブリッドとEVなどの種類がありますが、リチウムイオン電池に求められる性能は、それぞれに異なります。ハイブリッドが求める性能は、電力の出し入れの早さ、そして一瞬の出力の大きさです。一方、EVは航続距離を伸ばすため、できるだけエネルギー密度の大きいことが求められます。そのためリチウムイオン電池の特性は一樣ではなく、使われ方に合った製品が選ばれています。ちなみにパソコンなどに利用される「18650」という製品は円筒形ですが、日産「リーフ」が採用するのは薄いパウチ型。他に箱型など、さまざまな形状のリチウムイオン電池が存在します。



日産「リーフ」に使われるパウチ型のリチウムイオン電池。

期待される次世代の二次電池

リチウムイオン電池は、年々、利用の拡大と共に性能を高め、コストを下げてきましたが、さらに電動車を普及させようとなると、さらなる性能アップとコストダウン、そして安全性の向上などが求められます。そうした中で、次世代の電池として注目を集めているのが「全固体電池」です。これは電解液を使わずに、電池の内部をすべて固体化。電解液を使わないため、安全性が高く、さらに急速充電の性能が高いのが特徴です。大量の電池を搭載すると、それに合わせて充電時間も伸びてしまいますが、急速充電の速度が高まれば、そんな不便さも解消できるというわけです。



すでに実用化されているTDKの全固体電池。ただし、まだクルマ用には小さすぎる。

知っておきたい専門用語

容量	出力できる電力量のこと。kWhやAhなどで表される。
出力密度	電池の体積あたりの取り出せるエネルギー量。
過充電	完全に充電した後の過剰な充電。電池を破壊する可能性がある。
過放電	完全に放電した後も使い続けること。これも破壊の原因になる。
SOC (充電率)	電池の容量に対する充電の比率。 State of Charge。
サイクル寿命	充放電を繰り返して電力量が減り、寿命となるところ。